

ましたが、何のことはない、身の長三尺有餘もあらうといふ、
 劫を経た古狸でございます、今縁側の方へ出ますと、此奴を
 引摺いでドンとばかりに打付けました、なかく手は放しま
 せん、キヤツと一降叫びますと、忽ち家鳴り震動いたして、
 この廣島城も轉覆らんばかりの有様でございます、そのまゝ引
 摺いで廊下の外へ出ますと、板の間へ向けて五六遍といふも
 の引摺いで打付けましたから、骨も肉もグクに致して
 了ひました、到頭理は血を吐いて相果てましたことござい
 ます、それなりお椀側の履脱石の所にビヤリと投げ付けまし
 て、「態ア見やアがれ、妖怪奴天下の豪傑、國右衛門を知らぬか
 命知らずとは汝のこどだ、痴けものめ」早々當人は手水鉢で手
 を洗ひまして、片傍に置いてあつた雪洞を携へ、平氣なもので
 元の座敷へ歸つて参りました、正則、國右衛門、大變汝は長く考へて
 居つたな、國右、イヤ何うも腹痛でございましてな、甚だ失禮を致
 しました、國島公を首め御近習は、國右衛門の顔を見て居られ

ますが、平氣なものでございまして、ハナナ、とは思ひまし
 たけれども、まさか此方から尋ねるといふ譯にもなりません、
 正則、サ、汝が打つ番だ、發れ、國右、イヤ御前、大變に私が便所
 へ参る前とは違つて、並べ方が變つて居るやうですな、正則、コ
 ヲ、卑怯なことを云ふな、さて、其方は卑怯な奴である、何
 處が異つて居る、國右、左様ですな、斯ういふ石の形はなかつた
 ですな、正則、馬鹿を云へ、サツ打て、國右、斯うのこと………「彼奴を……」
 餘念なく盤面を眺め詰めて考へて居りました、先刻便所から
 出まして手は洗ひましたが、尾籠なことを申すやうですが、理
 の寢て在る所へ頭から潑せかけまして、其奴を穴から引摺り出
 して、肩に引摺ひで、小供がお注進でも打付けけるやうに、ビ
 ヤリ、打いたのでございまして、正則公は何處となく可怪し
 な臭ひが致しますから、正則、オヤツ、これは大變臭いぞ、其方
 隠へ参つて尻を拭いたか、國右、御冗談仰しやつちやア可けません
 ……アツ、失策つた、然う、イヤ道理で拭物がなかつた……」

と氣が付いて圓右衛門は右の肩口を見ますと、對金色に染んでございます。正則圓右、何だ其れは圓右オヤツ、是れは御前、大變なことを仕ました。正則何う致したのだ、何しろ臭くて堪らぬ。圓右實は御前、彼の便所の中に何だか怪しな奴が寝て居りましてね、其の頭から引溢けましたものと見なしまして、塵々毛だらけの手を出して私の尻を撫でました。正則ナニッ……圓右何うも其の時に色々な物が出ました。正則ア、何んな物が出た。圓右最初は三日小僧、それから高入道、次が無面怪物。正則へエ、何した。圓右其の方へ氣を取られて見て居りますといふと、雪隠の下からニッと手を出して撫でるので、到頭其の手を引捉まへて、椽へ引摺いで來まして、骨も砕けよと五六度肩へ引摺いで投げたのですから、大方其の時分は死んだでございませう。正則ナニ怪しき物を退治した、早く者共燈火を持って「ソッソッ」といふので起ち上らうとする途端に、圓右衛門は態と膝盤に片足を掛けて轉廻しました。正則コロヤ圓右、何故左様なこと

をする。圓右「ヤツ是れは失禮いたしました、また取りて打ち直しませう」。到頭拳骨を一つ瞞着して了ました。と云ふのが正則は其所どころではございません、大勢の家來を伴れて不開の廁へお出でになりまして、片傍の庭前を御覽に相成ると、最も年經し狸が、骨も何も砕けて了いて、口中より血を吐いて死んで居ります。正則何うも圓右衛門は大したことを致した、是れぞ不開の風、年古く後息をいたした狸、それを汝が退治したのだ。圓右イヤ其の功によつて恭は濃茶々々でございますね。正則甚い奴だ、アア負けて廻らう。何うも彼れの氣衆といひ腕前といひ、正則の意に底抵適ひました。ことございまして、是非共之れを家來に仕たいといふ思召しでございます、併し圓右衛門も當地に居ることが出来なくなつたといふのは、是れが加藤左馬介の方へ開けたものと見ゆ、遂に左馬介の方から殿しいところの談判でございます、よつて臣下の銘々も「恐れながら圓右衛門なる者を此のまゝお手許に置かせられては、遂には加藤家と片

豊公御前角

矢を交へんければならぬやうな次第になります。今のうちに暇をお出し遊ばした方がお宜しからうと存じます。と段々御見を申し上げました。正則公も借しいこととは思し召した。が致し方なく、團右衛門には其れ相當の旅費をお與へに相成りまして、お暇を下し置かれました。そこで團右衛門は金子のあるうちには少しも頼着なく、ナヲノ諸方を廻つて居りました。が何しろ大酒家でございますから堪りません。遂には攝州尼ヶの邊りから大阪へ下らんとする途中に於て、斬り奪り強盗は士の慣例とは云ひながら、面も白晝追剣を始め出すといふ。には後藤又兵衛基次との出會ひから、大阪入組のお話に移ります。が、一寸一息御免を蒙りましたして次回に。

第九回

されば團右衛門は福島公よりお手當を其れく頂きました。がナヲノ武家奉公を構はれて、抱へ手がなければ又その時の手取

豊公御前角力

が付く、と少しも頼着いたしませんが、行く先々に氣に遣つた旅宿があれは、十日が二十日でも逗留して、酒ばかり飲んで居ります。丁度今日しも乗込んで参りましたのは尼ヶ崎、また元の一文無しになりました。ア、困つた、是りやア何を宜い工夫はないか知らん、ア、ア、何うも乃公も斯うなつて了つては、世に出ること出まじ、何うならうと儘よ、飲ひだけ飲み盡して遣らうといふ考へで、尼ヶ崎の手前の松原へ掛つて参りました。が、ア、ア、一軒の茶店へ遣入つて休息を仕やうにも、その茶代さへ無いといふ始末、そこで松の根方に腰打ち懸けました。腕を掛いで考へて居りました。と、この前を通り掛りました。團右衛門はの世間話しを仕ながら、この前を通り掛りました。團右衛門はナヲノと之れを眺めます。と、團右衛門は、其れへ参る武士、時待たつしやい。〇、オ、何か用か、團右衛門は、身共は加藤左馬介嘉明に永らく仕へた、團右衛門直之と申す者でござる、永らく浪人いたして尾羽打ち枯らして甚だ困つて居る

武士は相見互ひといふことがあるから、氣の毒だが少しばかり
 路用の金子を貸して呉れ、厭といふなら仕方がない、乃公も一
 旦斯ういひ出した限りは後へは退かぬ、金子を貸さぬといふな
 ら、果合の勝負をするが何うだ、五六人の武士は果合に取られ
 て了ひました、何うも亂暴なことを云ふ奴もあるものだと思ひ
 ました、併し何うも名は博りたいものでございませう、加藤左
 馬介の家來堀園右衛門といふことを聞いて、慄然と致しました
 ○同役、何う仕やう、
 □兎も角も白晝斯かる所で泥棒が出や
 アがつて、吾々五人も六人も居つて、金子を奪られたと云つて
 は残念であるが、併し加藤の家來堀園右衛門と果合ひとつて
 は池も吾々は敵はぬ、君子は危きに近寄らすといふことある
 から、ア銘々出し給へ、そこで漸うのことに少々づゝ金子を
 出し合ひまして、之れを紙に包み、
 ○際て御高名は承はり居り
 ます、嗚かし御腰々のお身の上お困りでございませう、吾等と
 ても澤山の持ち合せはございませぬ、皆の者を獲へ樂めまして

漸う是れだけ出来ました、
 御勘辨を願ひたいもので、堀園成程、我らです、
 ○エ、五兩ござ
 います、堀園五兩、最うないか、
 ○最うございませぬ、堀園然うか
 無、併しお手前達は何れの御仁かは存せぬはれども、また
 る、併しお手前達は何れの御仁かは存せぬはれども、また
 何處かに合戦でも始まつて、戦場へ飛び出して堀園右衛門の腹中
 に金子が出来たといふことを聞いた、取りに來て呉れ、其の
 時には之れに利息を附けて返して還る、
 ○減相な、決して其の
 儀には及びませぬ、と這々の体で行つて了ひました、堀園右衛門
 は早速この金子を持つて尼ヶ崎の市中へ道入り込んで來ました
 旅宿を取ると直に酒を吩咐け、グイ、
 飲み始めました、其
 の金子のありますうちは、毎日酒ばかり飲んで逗留いたして
 居りました、錢が無くなる、
 ア、
 好い業体を思ひ付いた、
 斬り奪り強盗は武士の例、其れも何れ町人農夫を脅すといふので
 はない、斯くの通り尼ヶ崎街道は往來繁きことであるから、武

士が通つたら一々之れを脅して奪つて遁らう、といふ考へから
 また街道へ出まして松の根方に腰懸けて待つて居ります、
 と其れへ立派な武士が通り掛りました、團右「イヤお武家、暫ら
 くお待ち下され、武士何だ、待つてお止めなされたのは何か用か
 團右「左様です、此方は加藤左馬介嘉明に永らく仕へ、今は浪人
 いたし居る、城門と申す者だ、我中盛さ果て甚だ迷惑いた
 し居る、少々お手前の持つて居る金子を貸し給へ、貸すことが
 出来ねば果合の勝負、何方でも宜しい、返答なさい」この武士
 大きに驚きました、早速懐中から持ち合せた紙入を取り出だし
 武士「何うか之れにござるから、宜いほどお取り下され」檢めて
 見ると七八兩這入つて居ります、團右「、怒じ生中殺して置いて
 は我も迷惑するであらう、皆貸つて還るぞ、武士其れは餘り先生
 酷うございます、私は是れから中國へ立歸らんければなりません
 ん、そのうち路用にするだけはお免しなされて下さるやう、團右
 困つたことを云ふ奴だな、其れぢやア仕方がない、二分だけ貸

して遁らう、何方か何うだか反對でございます、這々の体で其
 のまゝ逃げて行つて了ました、また團右衛門は尾ヶ崎へ這入
 つて参り、旅宿へ泊つては又酒を飲むといふ、無くなるも街道
 へ立出でまして、通行の武士を引捉まへまして脅すのでござい
 ます、終には是れがハツと評判になりまして、ウツカリ尾ヶ崎
 の松原を往來することはお出来ぬ、飛んでもない追劍が出るさう
 だ、加藤嘉明の浪人城門といふからには名代の豪傑、左
 様な者に掛られては逆も敵はぬと、終には武士は通らぬやうに
 なりました、然るなりならずと團右衛門の業体も大きに閑暇で
 さいます、何れ好い鳥が悪かりさうなものだと忙然考へて居り
 ます、深編笠に面体を隠し、横郷子の羊羹色になりました、紋
 付の衣類を着まして、草鞋穿きで濊紙に包みました、槍をば引掛
 ぎ、ノコノコとこの前を通り掛りました、「オヤ、乃公のやう
 な汚い風体をして来やアがつたな、けれどもマア二本手扱んで
 居るからには浪人だから……オイコリヤ、ぼろく、待つて浪人何

だ 園右乃公は加藤左馬介嘉明の浪人者で、城園右衛門といふ者
だ、誠意に強中乏しく大に困つて居るのだ、汝の持ち合せの金
子を貸して呉れ、それをも貸すことが出来ないならば、果合の
勝負をするのだ、何うする」すると彼の浪人者は深編笠を脱ら
ず、何うも貴公お困りだらう、有れば貸しても返るが、生憎此方も
ない、無いからといつて斯うなれば此のまゝ通り過すといふ
にも行かず、汝の云ふには、金子を貸すことが出来なければ、
果合の勝負を仕よといふのだな、ちやア金子はないから出すこ
とは出来ぬ、果合の勝負を遣ちやか、園右、此奴野方途なこ
とを吐すな、城園右衛門直之と果合の勝負を遣らうといふのは
面白い、それぢやア抜け浪人イヤ最う其様なことを吐す、然らば
汝斬るなら勝手に斬るが宜い、園右、汝暢氣なことを吐す、然らば
園右衛門の腕前を見せて呉れん」云ふより早く拔き打ちに斬り
付けて参りました、大概の者なら異二つでございませう、なれど

か体を解した其の早業、空を打ちました園右衛門は、残念なり
と一刀を取直さんと致しました、この時精養のまどく手許へ飛
び込んだる其の早業、イキナリ園右衛門の利腕を捉むよと見
しが、一聞ばかり筋斗打たせてス、ソドクを投げ付けました、
流石の園右衛門も腰の骨を甚かに打ちまして、園右、一痛、大
變なことを仕やアがつたな、能くも乃公を投げた、全体乃公を
投げる位の奴だから、定めし名の通つた奴であらう、何奴だ面
を出せ、顔を處めながら其の所へ起ち上りますと、被つて居り
ました深編笠を脱つて浪人、イヤ、園右、好い業体を初めたな、
園右、イヤ、お前は後藤の兄貴ではないか、又兵衛、然うだ、又兵衛
だが何うした、園右、冗談ぢやアないぞ、道理で腹いと思つた、後
藤なら後藤と云つて呉るれば宜い、併ながら貴公は、大變に
ぼろ／＼した身装をして居るではないか、又兵衛乃公か、乃公も今
度黒田家を浪人したのだ、園右、ホ、ウ、何ういふもので、又兵衛今
黒田甲斐守長政とは意氣が合はない、畢竟する黒田家の五十二

萬石は、この後藤の槍先で取つて還つたんだ、其れに乃公を餘
 り粗末に取扱ひ、用ゐないから乃公は主家を捨て、浪人をした
 のだ。團右、それは兄貴、妙なことであるな、此方どても加藤左馬
 介が一國一城の主になつたのも、此方があつたればこそだ、其
 れを然うとも思はず致して、馬鹿に仕やアがつたから、主人に
 悪口を残して浪人を仕たんだ。又兵成程、其許のことは聞いて居
 る、汝は武家奉公を構はれたではないか。團右、その通り、そこで
 仕方がないところから此様な業体を初めたんだ。又兵、何うだ、
 儲かるか。團右、されば、資本の要らぬ業体だから、相當に武士
 さへ通れば儲かるが、この頃は一向氣の利いた武士も通らなく
 なつて了つて、大に業体も閑暇になつた、今日は好い盛柄に
 お前が通り掛つたから、後藤とは知らず、ア稼業を遣らうと仕
 たんだ。又兵、ホ、ウ然うか、乃公も黒田家を浪人する折、臣下の
 者に金子を恵んで遣り、はんの最う手と身でノコく、出掛けて
 来たんだ、汝は此の業体をして金子が貯つて居れば、少し乃公

に貸して呉れんか。團右、冗談ぢやアないせ兄貴、懐中に金子のあ
 るうちは此の厄ヶ時に泊つて好きな酒を飲んで居る、無くなる
 と斯うして出て来て居るんだ、何しろ乃公が此の街道に在ると
 いふので、金子を持つて居る武士は些ども通らぬ。又兵、ホ、ウ、
 併し何うだい、大名の行列は通るだらう。團右、其りやア通る。又兵、
 ぢやア其の大名の行列に掛つたら何うだ。團右、何だ、大名の行
 列……又兵、然うよ、中國九州邊の大名が上方へ上るには此の所
 を通るであらう。汝と乃公と二人で遣らうか。團右、此奴ア何うも
 兄貴有難いなア、か前と二人で遣つたら行けぬこともあるまい
 と。それぢやア然う仕やうと。野方途な奴もあるものでございませ
 又兵、併しながら、汝と乃公が行列の駕籠脇へで、乗り込んで
 行つて、無心を吹つかけて見る、そこで向ふが出て呉れると
 したところで、百兩出しやア五十兩づゝにしかならぬやうなも
 のだ、よつて兩人が少し距離を離れて松原の松の根方に腰かけて居て
 そこで西から来たら汝が先に出て應對をする、東から来れば乃

公が談じ初める。二所に分れて遣らう。園右成程、時れは面白
い。そこで二人は二十間ばかり距離を置いて、後藤が携へます
紙包みの槍といふのは、是れは秘蔵の日本腕の槍でございま
して、之れを引換いで向ふの松の根方に腰打ち懸けて待つて居
ります。何がさて然う毎日通りますせんが、この街道筋は随分
大名の行列も通ります。園右「イヤ、兄貴、西から来やアがつたぞ
乃公が初める番だな」いひながらヤツと様子を見て居ります。
「片寄れつ」といつて替固を仕ながら遣つて来た、やがてか
籠が其の前まで来ます。ハラクと側へ進まうと致しま
すから役人「コイヤ、狼藉するな」怒聲でもする者と思ひました
か、一家来の者は立腹ぎます。園右「イヤ、何方かは存せぬが
一寸行列を止まつて貸ひたい、拙者ことは加藤左馬介助明の浪
人、塙園右衛門直之と申す者である、誠に永らく浪人いたし、
尾羽打ち枯して甚だ難儀仕る、御諸侯様とお見受け申して、少
々御無心がござる、お持合せの金子を貸して頂きたい、それと

も貸すことが出来ぬやうなことになるれば仕方がないから、此方
にかけても借りて見せるが何うだ」附き従ふ近習の輩も呆れて
了ひました、用心の悪い街道もあればあるものだ、白登大名の
行列に追剥が掛るには前代未聞の話である、昔々呆れ返つ
て居ります、駕籠の内より「殿、イヤ、決して手向ひするな」
此様な亂暴な奴に手向ひをしたら、家来は塵段になつて了ひま
す、そこでお供頭を手許へお招きになりました、手許から些か
の金子を取らせ、殿「是れは城氏には定めてお困りであら
う、最些と持合せがあれば何うか致すのであるが、甚だ少
はあるが御受納下されたい」と金子を其れへ紙に包んで出し
ました、園右「これは有難い、ちやア遠慮なしに頂戴いたす、併し是
れは私一人頂戴すのだな、變なことを云ふと思つて居ります
と、園右「ア、是れから尼ヶ崎の市中へお遣入りになりますや、
向ふの方に私の兄貴が居りますから、其れにも相當のお手當を
遣つて下さるやう」家来の輩は呆れて了ひました、此奴の他に

未だ兄貴といふのがあるか、と驚きました、漸うのことに行列は立つて半丁ほども進つて来ると、松の根方に腰かけて居る浪人者があります、「オヤ、サア向ふに居るぞ」と見て居るうちに、被つた笠を脱り又兵「ア、一寸この行列を止まつて貰ひたい。〇、そりや出た、何だらう又兵「ア、何れの御仁かは存せぬが、拙者は黒田家の浪人、後藤又兵衛と申す者でござる、尼羽打ち枯して甚だ難澁仕る、何うかお手箱の金子を少々拜借を願ひたい、厭なれば仕方がない、久々に日本様の槍の切れ味をお目に懸けませう、側附の面々は蒼くなつて了ひました、成程乃公の兄貴だといつた筈だ、さては後藤又兵衛であるかと驚きながらも家来恐れながら御前、如何取計ひませう、殿大變に役人か出るではないか、仕方がない道はせ」また「お手箱から金子を出し差出しました家来、定めて其れはお困りでございませう、些少ではござるが進上申す又兵、成程、ア、成程ござるな家来、ハ、ハ、ハ、又兵「イヤ、何程ござる家来、三十金でございます又兵、三十

金……ア、今この向ふに塙團右衛門が居つた、らう家来「ハイ、在でございませう、又兵、彼れには何程お進りなすつた家来「エ、彼のお方にも三十金出しました又兵「ハ、ア、塙團右衛門が三十兩なら、此方は五十兩の直打はござるな、また彼れが五十兩なら此方は百兩だ、ア、是れはお返し申す」云ひながら「日本様の槍の切れ味をお目に懸けやうといふので、澁紙包みを解さかけました家来「ア、一寸お持ち下され、其様な亂暴なことをされて堪りますものか又兵、それでは五十金にして下さるか」そこでまた「家来は主人の例へ来つて此のことを申しませると殿「何うも致し方がない、最う二十金出して遣れ」斯く亂世とは云ひながら、一國一城の大名たるべき者が、尼ヶ崎街道で白晝追剣に遭ふとは沙汰の限りである、と思召したか何うも致し方がない、斯様なことは世間の人に話しても出来ぬと、道々の体でこの行列は行き過ぎて了ひました、跡で塙團右衛門は海へ遁つて来ました、團右「何うだ兄貴、してか手前は残らな、又兵、五十金

きかごとく、殿下御存生中に秀頼公御年十五歳に成り給へば、
元々通り徳川より其の天下を豊臣に復すといふ約束があつた、
とだ、然るに未だ其の運びに至らぬといふので、何うも此のま
ゝ安閑として居らるべきことではない、能度大坂方にて旗を懸
けるに相違ないと心得て居る、その時にか手前は武家奉公を構
はれて居るのなら、大坂へ入城仕たまへ、吾等も大坂へ入城に
及び、關東百有餘萬の軍勢を引受けて、深く取ひを致し、若し
秀頼公の運の開かぬ時は、大坂城を枕として討死をする決心だ
何うだ、國右衛門、國右成程、左様かイヤ、流石は兄貴だけあつて宜
いどころへ考へが付いた、如何にも拙者これから大坂へ参つて
入城しやう、貴公も一緒に行き給へ、又兵イヤ、乃公は今分のど
ろは入城は仕ない、能度戦争が始まるといふことになつて來た
ら、その節入城を致す積りだ、何うか其の積りで居て呉れ給へ
そこで其の夜は夜徹し酒を酌み交しなから、十分相談に及びま
したが、さて翌朝になりますと、またの再會を致して、後藤

國有ヤツ、輕蔑を仕やアがつたな、乃公アこれから追駈けて還
る、又兵イヤ、汝が三十兩なら、乃公は五十金位の直打はある
だらう、イヤ、兎も角も金子のあるうちは旅宿に泊つて飲まう
そこで尼ヶ崎の市中へ這入つて参り、其の夜は旅宿に泊りまし
て又兵、何うだ、國右衛門、汝も乃公も供々に浪人になつたもの、
乃公は別に武家奉公は構はれて居りやア仕ない、けれども黒田
家退散の御、憚りながら黒田五十二萬石は、この方の槍尖で取
つて遣つた知行だ、随分失はないやうに仕なさい、といつたら
汝も此方のやうに五十二萬石に成れるか、といつたから五十二
萬石が一粒居れても奉公は仕ない、といつて出たのだ、國右ホ、
ウ、随分兄貴も大言を吐くぢやアないか、又兵そこで今此方は五
十二萬石はさて置いて、百萬石にもなれるといふ見込が付じ
居るのだ、國右ホ、何うして、又兵何うしてといつて、ヤア考へ
て見給へ、關ヶ原の一亂から此の方、何れも諸侯の面々關東に
編ひ調ひ、今家康殿の勢ひ盛んにして、大坂に秀頼公あつて無

又兵衛はこの所を出立なし、大阪の方へ参りまして、時かに片桐且元に面會の上、泉州堺の向ふに當ります。和泉の大津といふ所へ参つて、時の到るを相待つて居りましたのでございませ、然るに瑞團右衛門直之は遂に大阪に來りまして、是れまた片桐且元に面會の上、大阪方に御奉公の儀を願ひ出でました、何しろ有名なる團右衛門のことでございませから、早速このことを秀頼公は御披露に及びました、秀頼公は殊の外の御悦びでございまして、彼れをお召抱へといふことに相成りました、その上侍大將を仰せ付けられましたことでもございませ、されば立派なお屋敷を賜はりました、團右衛門は暫らく大阪に足を留めて居りましたが、遂に慶長十九年關西關東談判手切れといふことに相成りましたのは、所謂秀頼公大佛に於て鐘の供養を催さんとなされし時、この鐘の銘文に就いて關東から故障を付けて参りました、いよ、双方戦端を開かねばならぬといふ場合に立至りました、團右衛門直之の戦ひの砌に於きまして、花

々しく打つて出でまして十分功名を致しましたが、一旦關東關西御和談といふことになりました、其の翌年の春に至り、また右衛門直之は、紀州豊井川の戦に於て討死をせねばならぬといふ、團右衛門名譽の戦死の一段より、お話し元に復つて彼の毛谷村六助と角力の勝負となり、これがために一つの騒動を惹き起すといふお話しから追々と續いて二十番目には黒田の家臣母里太兵衛、又福島の家臣桂市兵衛の飛入より、可兒才藏の取組或は二十六番の龜田大隅、又は二十九番の花房助兵衛、三十三番の澤村才八、三十五番の木村又藏等について程々の面白き傳記より、追々六助の秘術を盡す角力の取組より、引續いて此の土俵におきまして、微塵彈正本名京極内匠を引出しまして、遂に軍陣の血祭りといはして、彼の吉岡一味齋の妻娘の三人に首尾よく本懐を達せしめやうといふ六助は加藤清正の臣下と相成つて、貴田孫兵衛宗春と改名に及び、後に其の英名を轟かしませ

るといふ、大團圓までの講談は連も本筋にては申し上げられ
せん、毎度ながら紙数の限りにつきまして、引續いて第三篇を
「入鹿ヶ原大仇討」と表題を下し、伺ふ事に仕りまするから、
讀者諸君三篇の出づるを待つて、相變らせなう御愛顧あらんこ
とを伏して願ひ置きまする。

三十番豊公御前角力 (終)

明治三十五年十月十二日印刷
明治三十五年十月十六日發行

口演者 神田 伯龍

大阪市西區北堀江上通一丁目二十七番地

發行者 田中直次郎

大阪市末吉橋通四丁目十六番地

印刷者 井下幸三郎

大阪西橫堀御池橋西詰一丁目ノ辻北へ入

發賣所 田中文泉堂

大阪市南區御池橋東詰南へ入

賣捌所 柏原圭文堂

不許
複製

(附奥力角前御公豊番六卅)

入鹿野ヶ原大仇討

神田伯龍講演
丸山平次郎速記
鈴木錦泉密書

東光齋煤林講演
丸山平次郎速記

三十所觀音靈驗記

願美製本表紙反口書共
極彩色木版四十度摺

崇禪寺馬場

定價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演
丸山平次郎速記
鈴木錦泉密書

中將姫

願美製本表紙反口書共
極彩色木版四十度摺

元龜天正以來仇討の中に最も悲惨に堪る可憐は
遠城兄弟の崇禪寺馬場仇討にして始を神の退
治に起し郡山にて戀の回達より欺討となり母を
兄とか義理と情愛より離れし故郷を後に見て
國通歴の上仇傳入郷を幾度か避ひ幾度か失ひ終
に崇禪寺馬場にて悲惨の最後可憐返討となり
しも春天この卑怯の傳入郷の迷ふ十重父の手に
殺さる如何に悲惨なる如何に可憐なるか
一冊 五錢

田中文泉堂發行書目

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 關東 小次郎	松林伯龍講演 今村次郎速記 大岡政談 一人曾我 谷重次郎	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 錦城齋貞玉講演 速記社々員速記 英雄の大仇討 太田政之助	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 三十所觀音 放牛舎桃湖講演 放牛舎湖道人速記 音靈驗記	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 三馬術 日向本 向井九郎治	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 田伯龍講演 丸山平次郎速記 明智三羽鳥
表紙口書木版 極彩色美製本	表紙口書木版 極彩色美製本	表紙口書木版 極彩色美製本	表紙口書木版 極彩色美製本	表紙口書木版 極彩色美製本	表紙口書木版 極彩色美製本
正假金六廿五錢	正假金六廿五錢	正假金六廿五錢	正假金六廿五錢	正假金六廿五錢	正假金六廿五錢

東京報知新聞社々載

探偵小説 大兇稻妻強盜

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十二錢

神田伯龍講演 元八重垣流 吉岡義勇傳

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十五錢

東京報知新聞社々載 探偵小説 本慶次郎

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十二錢

神田伯龍講演 三十番 公御前角力

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十五錢

松林大流講演 安藤肅太郎連記 嫁の常五郎

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十二錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記 入鹿野夕原大仇討

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十五錢

加藤信次郎編輯 古原お樂

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十八錢

真龍齋貞水講演 酒井藤造連記 根津四郎右衛門

表紙口書木版
極彩色美製本

正價金六十二錢



中文泉堂發行

五
卷
全
一
冊
鄭